

各水試発トピックス

令和6年度全国水産試験場長会 会長賞受賞 －温暖化に対応するコンブ養殖技術の改良と 普及に係るコンブ成熟誘導技術の開発－

令和6年11月7日に長野県長野市にて開催された令和6年度全国水産試験場長会全国大会において、コンブ養殖漁業振興研究チーム（前田高志主査（稚内水試）、秋野秀樹研究主幹（函館水試））が全国水産試験場長会会長賞を受賞しました（写真1）。

全国場長会会長賞は、地域の水産業の発展に大きく貢献するとともに、試験研究の成果が今後の水産試験研究の発展に寄与すると認められる業績に対して授与される賞となっており、授賞式に伴う講演においても高い評価を受けました。

近年、道南海域では高水温など海洋環境変動の影響により、採苗に用いる成熟した母藻の確保が難しくなり、これに付随した問題が発生しています。特に、母藻成熟の遅れは、種苗生産や養殖開始時期を遅延させることで収量減少につながります。このような問題点をふまえ、多角的な視点で研究を実施しました。

まず、母藻を効率良く成熟させるための水温や照度等の条件を明らかにしました。次に、この基礎的な知見を基に函館市内の種苗生産施設にて成熟誘導技術の実証試験を行い、天然条件で成熟した母藻を使った場合よりも早期の種苗生産が可能であることを事業規模で証明しました。さらに、母藻の成熟誘導により生産された種苗を用いて実地養殖試験を行いました。その結果、通常より約

1か月早く養殖を開始でき、収量（乾燥重量）で約3割も増量することや、品質に問題がないことが確認されました。

一連の研究で構築された成熟誘導技術が、現在、道南海域の多くのマコンブ養殖生産現場で採用されており、実用性が極めて高いと評価されました。

今年度は道内各地で天然コンブの不漁が報告されており、コンブの生産量減少が全道的な問題となりつつあります。本研究では、種苗の保存や遺伝子の多様性に関する基礎的な知見も得られており、今後は本養殖技術の普及と連動してコンブ漁業の持続的な発展に寄与することが期待されます。最後に本研究にご協力いただいた多くの方に深謝するとともに、謹んでご報告いたします。

（佐藤敦一 稚内水試調査研究部）



写真1 受賞した前田主査と秋野研究主幹
（左から3番目と4番目）